天気予報を無視した結果

御倉リョウ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
天気予報を無視した結果

【Ｎコード】
Ｎ６８６３Ｈ

【作者名】
御倉リョウ

【あらすじ】
傘を忘れた哀れな少年の青春の一ページ。

（前書き）

構想時間十秒、創作時間三十分くらいの訳分からんストーリーです。

「今日の降水確率は百パーセントです」

朝の天気予報士がそう告げた。雨？　ＡＭＥ？　飴？　はっ！　ンな事言ってどうせ振んねえんだろ？　分かってますよ。この百パーセントなんて何を根拠に言ってんだか。というわけで今日俺は傘を持って行きません！

学校に到着すると傘立てには傘がたくさんあった。はん！　どうせ降んないのに馬鹿な奴らだぜ。余計に荷物増やしてんじゃねえか。馬鹿が！

午前の授業中、空が曇ってきた。あ、あれ？　もしかして降る？　いやいやいや、ありえねえから。あれだ、あれ。一時の曇り空だ。すぐ晴れるさ。

午後の授業。ザァー。降った。降っちゃったよ。マジ？　いやいやいや、通り雨じゃね？　つかそうだろ。そうであってくださいお願いします！

放課後。ドザァーーー！！　土砂降り。

うん、なんていうかまあ、馬鹿は俺みたいな？　うんおもしろっ！　あはは、皆笑えよ！　超無様な俺の姿を見て大爆笑してくれよ。

「ねえ、あの子もしかして傘持ってきてないんじゃない？」

「えっ、マジ？　うわ、あれ絶対持ってきてないよ。」

「今日降水確率百パーって言われてたのにね。マジ笑えるー！」

キャハハ、と笑いあう二人組の女子生徒。聞こえてんぞコラ。笑えと言ったが、実際笑われるとかなりムカつく。しかもよく見るとその二人以外にも沢山の人が哀れみ、見下し、嘲りの目で俺を見ていた。

これは公開処刑か？　やべ、ちょっと泣きそうだ。

涙をこぼさないように上を向くとふと俺の頭の上に電球が浮かんだ。勿論比喩だ。実際頭の上に電球が浮かんでたら怖い。閃いたと言う事だ。

「そぉぉぉだぁぁぁぁあ！！」

俺の突然の叫びに周りの奴らが一歩俺から距離を取った。

叫んだことを後悔しながら俺は傘立てに近づき、手を伸ばした。周りから声が聞こえる。

「オイ、アイツ傘立てに向かうぞ。何する気だ？」

「さあな？」

ふふん。俺は野次馬の声を聞き、自分の案に酔いしれながら一本の傘を抜き取った。

それは黒い傘。勿論俺のじゃない。誰のかは知らん。

野次馬の一人が信じられないものを見たような声で喋りだす。

「う、嘘だろ？　アイツ、傘バンクしやがった……！」

「マジかよ！　アイツ何者だよ……」

そう、俺がやったのは『傘バンク』。傘バンクとは、今も昔も、正確に言えば紀元前三世紀より今日に至るまで変わりなく受け継がれる暗黒の儀式。簡単に言うと『傘泥棒』だ。

これで帰るのに必要な物は手に入れた。くくくっ、最高にハイってヤツだーー！！

今まで俺を笑っていた野次馬達に目を向ける。俺が目を向けるとヤツらは一斉に目を背けた。スカッとざま見ろ笑いがとまんねえ。

そんな時階段から一人の女の子が降りてきた。

背中まであるセミロングな髪、ぱっちりとした目、一見スレンダーだがよくみるとバランスのいいスタイル。可愛い。

そうだ、あの子は俺と同じクラスのめちゃくちゃ可愛い子だ。よし、傘も手に入れたことだしあの子と帰ろう。

下駄箱から靴を出し履き替えているところを声掛けた。

「今帰り？　じゃあさ、一緒に帰んない？」

「うん、いいよ。一緒に帰ろ」

よっしゃぁぁぁぁぁあ！！　今日はついてんぞぉぉぉお！

彼女は靴を履き、傘を取ると笑顔で俺に近付いてきた。笑顔が眩しいぜ……。

「じゃ、帰ろっか」

「そうだね」

二人同時に傘を開く。彼女の傘はピンク色でとても女の子らしくて彼女の可愛らしさを一層引き立てていた。

「え……？」

ぴたり。彼女は足を止め糸が切れた人形のように動かなくなってしまった。

「どうしたの？」

「……」

呼びかけても返事がない。おかしいな。ふと俺は彼女の視線が俺のパクッた傘に向いている事に気付いた。

何だろう？　俺は自分の傘を見上げた。

絶句。何故だ？　傘の表面は黒くて渋い感じの傘だったのに……。

何で中はアニメの美少女の絵なんだ？

痛車ならぬ痛傘（いたかさ）だった。

「うわぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！」

俺は傘を放り出し、彼女を置いて逃げ帰った。

（後書き）

自分がこんなことになったら次の日から学校行けませんね。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6863h/

天気予報を無視した結果

2011年10月6日00時59分発行